

『尖りたい!』

作 佐藤慎哉

【シーン1】

〈カット1〉玄関（朝）

玄関の扉が閉まる（彼女が部屋を出ていったところ）。
玄関に残された秋本の後ろ姿。

秋本 「……。」

【シーン2】（昼）

〈カット1〉窓辺

秋本が窓の外を見ている。

（秋本）

「付き合って一年になる彼女にふられた。
いつも僕はこうだ。長続きしない。
人はそんなに簡単に変わらないらしい。」

振られたきっかけは些細なことだった。
久しぶりのデートの帰り道、酔っ払いのサラリーマンが絡んできて、彼女が肩を組まれた。彼女は腕を振り払い、酔っぱらったサラリーマンは怒って去っていった。僕はそれを笑いながら見ていた。それだけのことだった、と僕は思っていた。けれど彼女は違った。
その後の僕の家に向かう道中、彼女は一言も口をきかなかった。
そして次の日の朝、僕はふられた。
彼女曰く、絡んできたサラリーマンに僕が怒らなかったのが問題らしい。

〈カット2〉キッチン

少し散らかったキッチン。お湯が沸くのを待っている。
僕は昔からこうだ。何か気まずいことがあるとへらへらしてその場を誤魔化す。さっきだって、彼女が一方的に怒り、僕は笑みを浮かべてそれを聞いていた。
僕だってどうにかしたいと思ったことはある。前の彼女が僕の友達と浮気していると知った時も、僕は笑って誤魔化してしまった。

でも、どうなんだ？

人には欠点の一つや二つくらいあるだろ。彼女はズボラで、片付けは下手だし、花なんか買ってもすぐに枯らしちゃう。これなら枯らさないって、頻繁に水をあげなくていいミニサボテンを買った時だって枯らした。

お湯が沸き始める。

でも僕はそれを許して、かわいいとすら思っていたじゃないか。僕がへらへらするのであって見方を変えればかわいいだろ！なんで僕だけ一方的に。

いや、でも確かに今回のことは僕が悪かった。あの時あのサラリーマンに怒るべきだった。

やっぱり変わらないと。彼女に戻って来てもらうには変わらないと。

僕にだっていいところはある。夢中になると周りが見えなくなるほど、突っ走れるところだ。本気でこの性格を治そうと思えばぎっと治せる。尖らないと。尖ってここぞという時に、へらへらせず言い返せるようにならないと。」

【シーン3】 (昼)

〈カット1〉ローテーブルの前

机の上にミニサボテンが一つ置かれている。

それを見つめる秋本。

(秋本)

「僕は変わる努力を始めた。

ただ尖ろうと思ってもだめだ。それは以前挑戦してすでに失敗している。だから僕は自分に負荷をかけることに決めた。

僕は、尖らないといけないタイミングを逃すたびに戒めとして、ミニサボテンを買うことにした。

こうすれば、逃した回数がはっきりするし、針の尖ったサボテンを見るたびに尖らなくてはという意志が蘇る。

これは昨日尖り損ねた分だ。

尖っている。実にサポテンは尖っている。この尖りが僕にもあれば。くそ！

しかし、こうしてサポテンを改めてじっくりみるとなんとも可愛い。

確かに尖っているが、フォルムも可愛いし、針に包まれた茎部分もキュートだ。

こいつ尖っているくせに可愛いのか。

なんだ！お前は完璧か！ちくしょう！

いや、そうか、これか。これが僕の目指すべき姿。トゲがあるのにはみずみずしく可愛い。

これだ、これこそ僕の理想とすべき姿。

僕もこうなれば、彼女に呆れられることはない！

サポテン！お前は僕が進むべき道すら示してくれるのか。

なんていい奴、なんて愛しいやつ。

ありがとう。これで変われる。僕は変われる。」

【シーン4】（夜 or 昼）

〈カット1〉ローテーブルの前

秋本が机に向かって座っている。

机の上には大量のミニサポテン。

（秋本）

「ダメだ！変われない！変わらない！

逃しすぎだ。僕はタイミングを逃しすぎだ。

これじゃもう机の上がメキシコじゃないか！

どうして僕はこう尖れないんだ！

教えてくれ、教えてくれサポテン達よ！どうしたら、どうしたら僕は尖れるんだ！

どうしてお前達サポテンお前はそんなに尖っているんだ。どうしたら僕もそうなるんだ。なんでこんなに可愛いのに尖って

られるんだ。僕も尖りたい。

・・・待て、なんでサボテン達にはトゲがあるんだ？サボテンが生えて
いるのは乾燥した地域。多く水を湛えた茎は外敵に狙われやすい。
そうか、トゲは大切な茎を守るために存在しているのか。
サボテン達には大切な守るものがあるから尖れるのか！
守るもの。僕に何か大切な守るべきものがあるか？！
・・・ある、たった一つだけある。」

〈カット2〉床に置かれた携帯。

その時携帯のバイブがなる。

画面には「ゆみ」の文字。

秋本は携帯を手取る。

〈カット3〉ローテーブルの前

秋本が携帯が携帯に出る。

秋本 「もしもし。・・・うるせえ！サボテン達を枯らすような女と付き合っ
てられるか！このズボラ女が！」

秋本は電話を切る。

そして満足そうな笑みを浮かべ、サボテン達を見つめる。

（秋本）

「ありがとう。サボテン達。僕は尖れた。」

おわり。